

## 江戸城を歩く

### 江戸は未開の地

家康が秀吉の命令で武蔵国に転封されたのが一五九〇年。そして秀吉の死が一五九八年（慶長三年）。それから十六年後の一六一四年（慶長十九年）に大坂冬の陣、翌一六一五年（慶長二十年）が大坂夏の陣。豊臣氏は滅亡し、徳川幕府による本格的な統治が始まったのである。ところが家康は一五九〇年江戸入府と同時に嘗ての日本では見られない大規模な、幕府政治の中心地を築くべく、大工事に着手しているのである。構想極めて大。家康の偉大さを彷彿とさせる。

家康が初めて武蔵国に来た一五九〇年、江戸の地勢はいかなる様子であったのであろうか。まず江戸湾が大半を占め、佃島は海洋の孤島、ぽつんと離れた海の中。江戸前島（大手町から新橋まで）が半島のように突き出ており、その西側に江戸湾の入り江が入り込み（日比谷入り江）、入り江の北側に粗末な江戸城があり、入り江のさらに北側から西、南へ

と囲むように神田山から続く山の手台地が在り、山麓の谷間を縫って平川、石神井川が日比谷入り江に注いでいる。神田山の東には「お玉が池」が拡がり、隅田川は海の入江のように幅広く、周囲は陸化した土地（湿地帯）が拡がり、そこから東の一带（深川方面）は完全な低湿地帯で、江戸湾がぐんと小名木川まで迫っていた。

■図番1 家康入府当時の江戸地勢

## 家臣総出の土木工事から天下普請へ

そのような未開の地に家康は家来約一万人を連れて来たのである。当然、城の周囲に家来が住む場所は限られていて、日比谷入り江周囲の僅かな陸地があるのみ。屋敷を建てようにも土地が無いため、やむなく点在する民家に頼む、あるいは粗末な小屋のような家屋を造って住まわせる有様であった。家来達をそこから江戸城に通わせたのである。

彼らは江戸城を見て驚いた。西国の城とは、高い城壁に囲まれ、豪壮な天守閣や隅櫓

が聳えている。そうした姿を見慣れている家来達にとつては、これは城などといえる代物ではない。盛り土に竹木が茂り、その上に砦のような建物があるだけ。側近の本多正信などは、せめて玄関だけでも造りましようと言する。しかし、家康は、「要らざる立派だては無用」とこれを一笑に付す。城など後回し。まずは食料の確保である。とりわけ、塩は基本的な食品。塩と言えば、行徳の塩田がある。そこで家康は、行徳まで東に一直線の運河を掘削する。家来達は刀から鋤鍬を手にし、土方になる。まず日比谷入り江に流れ込む平川の流れを変え、道三堀を掘り、隅田川へと直結。隅田川を渡ってさらに直線的に運河を掘り中川に繋げる。これが小名木川である。すぐ側まで江戸湾の波が迫っている。そして中川に出ると、その先さらに行徳までの直接ルートを切り開く。塩田拡大。豊富な塩が常時入るようになる。塩に続いて膨大な農作物が運び込まれるようになる。

それから、江戸の土地大改造に着手する。まず、平川、小石川、石神井川の流れを変え、浅草橋から隅田川に流す、神田川放水路の大工事。これにより、洪水を防ぐと共に外堀となす。後に江戸の水源ともなり、重要な運搬経路ともなる。さらに、神田山を初め、周囲の山々を削り、平地にすると共に、日比谷入り江を手始めに、江戸湾を埋め立てていく。家臣達は総出で慣れない鋤鍬を振り上げ土木屋と化す。この大工事に全国から人々が江戸に集まってくる。こうして居住地を広げ、家臣団の広大な屋敷の割り当て、町地の創設が行われ、ついに日本最大の規模を誇る江戸城の建設に着手する。

## 江戸城構築

江戸城の原点は一一八〇年江戸重継、一四五七年太田すけなが資長の居城にある。しかし、それらは砦のようなもので城郭などと呼ばれたものではない。天下普請は幕府開設の三年後から始まり、第一次工事が一六〇六〜〇七年

頃、第二次が一六一二〜一五年頃、第三次が一六二〇年。以下、第五次まで続く。城郭が完成し、町地が整備され大江戸の原形ができる。迂回した平川、小石川の流れを利用し、南の大きな溜池と繋げ、外堀を完備する。一六〇六年本丸御殿、二の丸、三の丸を築造。一六〇七年天を突く五層の大天守閣ができる。その後も造営、改築が繰り返され、寛永一三年（一六三六）江戸城の総構が完成する。この前代未聞の規模と精緻な建築物の完成に要した期間は実に五十年。家康から始まり、秀忠、家光と三代の将軍に及ぶ。家康の構想の大きさを物語るものである。

江戸城の存在をさらに大きな視野で見ると、南に二十五万坪に及ぶ増上寺を、北の上野の山に寛永寺を擁し、江戸城南北の鬼門封じと砦としての大構想を見て取ることができ

## 外堀を歩く

増上寺から江戸城の外堀に沿って一周して

みよう。増上寺大門を左に見て東海道を北に上る。浜松町一丁目、神明町、そして芝口三丁目。東海道の両側は町民の家宅がびっしり。町地の左右は全て大名の上屋敷。右側約三万坪に及ぶ会津松平容保中屋敷に続いて二万六千坪の伊達家上屋敷（汐留）。屋敷の東側に汐留川が流れ、その海沿いには、広大な浜御殿がある。芝口一丁目が終わると、外堀に芝口橋（中央通り、銀座八丁目交差点、旧東海道）が架かっている。堀に沿って道が造られており、芝口橋を渡らずに堀に沿って右に歩けばすぐに汐留橋。ここで堀は二つに分かれ、南に行けば浜御殿、北に行けば三十三間堀（歌舞伎座三原橋交差点を銀座よりに入った南北の道）。芝口橋から左に行ってみよう。右手に外堀を眺めながら少し歩くと幸橋。堀の向こうにいかめしい幸橋御門が見えている。さらに進むと新シ橋（外堀通り、虎ノ門右の西新橋一丁目交差点付近）。これを過ぎると堅牢な虎御門（虎ノ門交差点）。虎

御門を経ると外堀はちよつと南に下り、溜池に直結する（金刀比羅神社前）。ここまで外堀を挟んで両側には大名屋敷がびっしり。ここから外堀沿いの道は、溜池南縁に細長く続くおおまと大<sup>お</sup>的<sup>まと</sup>稽古場（弓の稽古場）に沿って行く。やがて溜池の対岸向こうに広い日吉山王大権現社の杜が聳え、赤坂田町一丁目を過ぎると火除け場が拡がり右手に堅固な赤坂御門が見える。さらに行くくと紀伊国坂の登り。右下に流れる堀の向こうには、広い井伊直弼の中屋敷（ニューオータニ）や尾張中納言の拝領屋敷（上智大学）が望める。その間に紀尾井坂が麴町に向かってのびている。紀伊国坂を登ってさらに行くくと、右手に四谷御門が見える。これを過ぎると次が市ヶ谷御門。左を振り返ると、広大な尾張中納言上屋敷（防衛省、旧陸軍士官学校）。さらに北に歩くと牛込御門。この辺り旗本、御家人の家宅がびっしり並んでいる。そして江戸川が外堀に流れ込む船河原橋に出る。堰から水が流れ落ちる音が



聞こえる。ここを江戸っ子は通称「どんどん」と呼んだ。ここから外堀は東に蛇行し小石川御門を経て神田川となり、水道橋、お茶の水を經由。昌平橋、筋違い御門を渡ると、川の右手に柳原土手が連なる。この土手沿いに歩くと浅草橋、浅草御門に到着。そこからは両国広小路が拡がり、柳橋が隅田川沿いに架かっている。このように外堀は、江戸城の外郭を構成している。では、隅田川、江戸湾に至る江戸城東側一帯の堀はどうであろうか。ここは縦横に堀や川が巡らされており、川は物資の水上運搬だけでなく、堀の役目も担っているのである。そこで、江戸城東側の、城に最も近い外堀を歩いてみよう。

城の北側、九段坂下、俎橋、飯田川を下ると雉子橋に出る。一橋御門を潜る（一橋）。堀の左は広大な明地が拡がり（神田錦町）、右は一橋慶喜の上屋敷。神田橋御門（神田橋）を潜ると左に鎌倉河岸が続き、竜閑橋が見えてくる。竜閑川が堀に注いでいる。南に回り



下ると常盤橋が見え、杵形御門がある。左に金座（日本銀行）。外堀は広がり、堀と川が交差する。右に道三堀、左一石橋から日本橋。この外堀交差を抜けると、すぐ呉服橋御門（呉服橋交差点）。堀の右側には北町奉行所があり、大名上屋敷が連なる（東京駅、丸の内）。右側は町人町が広がる（日本橋、京橋）。まもなく、鍛冶橋御門が見えてくる（鍛冶橋交差点）。これを過ぎると左に京橋川が流れ込む比丘尼橋が見え、さらに下ると数寄屋橋。右手に数寄屋橋御門があり、その裏に南町奉行所。これを潜ると堀幅はさらに広くなり、左手に山下御門（泰明小学校からJR東海道本線付近）。ここから外堀は二つに分かれ、一つはぐるりと回って日比谷御門から内堀に。もう一つはまっすぐ南に下がって幸橋御門に出る（第一ホテル）。ほぼ今日の外堀通りである。これを含め、城から江戸湾までの堀、川はほとんど道路と化している。

内堀を歩く

続いて大名にでもなった積もりで内堀を時計回りで一周してみよう。日比谷堀に沿って西に歩くと、やがて外桜田御門が見え、桜田堀になる。堀幅は一段と広くなり、左側に広大な井伊家上屋敷が展開。さらに北に登ると半蔵御門。そして半蔵堀。これを過ぎると千鳥ヶ淵。そして北の頂点、田安御門。ぐるりと回って牛ヶ淵、清水堀を経て竹橋御門。さらに南へ大手堀、大手御門を経て桔梗堀。桔梗堀から東へ和田倉堀があり、道三堀へと続く。和田倉堀から南に下る堀が馬場先堀。馬場先御門を南に下ると日比谷御門に戻る。馬場先堀の右側沿岸が八代洲河岸である。

さらに江戸城の中核をなす本丸、一の丸(家光以後將軍嫡子や生母が住み、本丸に準拠する館。現在、東御苑として一般に開放)を囲む内々堀がある。北の平川堀から時計の逆回りに三日月堀、蓮池堀。そして最南の蛤堀。ここから東側をぐるりと北に回り込こんで二の丸を囲む堀(宮内庁病院、皇宮警察本部)

が内々堀である。

本丸の西南に、将軍の隠居所たる、広い西御丸御殿領（宮内庁）があるが、ここも内々堀に囲まれている。西御丸領には、北から、紅葉山、家康から始まる歴代将軍の御霊屋、西御丸大奥、西御丸御殿と続き、御領南端に架かる橋が、我々が皇居でお馴染みの二重橋である。また、西御領内西寄りには、道灌堀（現在、途切れ途切れにある）がある。そして堀を挟んだ西一帯が吹上御庭（現在の御所）となる。このように江戸城は、幾重もの堀に囲まれていた。

■図番2 江戸城御堀外観図

## 江戸城の中枢部

大手堀を渡り巨大な枡形の大手御門を通ると大番所がチェック。ここから御城。総面積実に三十万七千坪。広大な広場（皇宮警察）には家来が待機する腰掛があり、下乗御門に進む。ここにも大番所。馬を下りて内々堀を渡ると、再び枡形御門。くの字に左へ出ると

長大な百人番所の館。周囲は巨岩を積み重ねた城壁がそそり立っている。ここから中の門を潜る。右に銅門が在り、そこから先が豪華な二の丸御殿である。左に行くと再び堅牢な新門が構えている。その先に蓮池堀の南角に美しい富士見櫓が聳えている。複雑な構造である。そして初めて御本丸に近づく。将軍謁見の大広間。将軍が座する上段の間。二十センチほど下がって中段の間。ここには御三家、御家門が拜謁。さらに下がって下段の間。徳川氏譜代大名が坐す。さらに二之間、三之間、四之間と続く。ここには関ヶ原以後の臣従外様大名が坐す。大広間は五百畳の広さ。正月拜謁と言つても大名は顔も上げず伏している。将軍と顔を合わせることもない。続く白書院は、将軍が公的な行事を行う処。老中が政治上の意見を述べるところである。そして黒書院は、将軍が日常的な行事を行う処でいわば応接間。さらに数多くの間がある複雑な構造。その精緻で芸術性高い建築物には驚

きのほかない。江戸の技術の粋を結集した建造物。ここで堅牢な仕切り壁があり、これより御本丸中奥に入る。広い中奥の果てはもう一つ銅仕切りがあり、将軍のみが入れる本丸大奥へと突き進む。これは家康の時代から家族との私的な生活を結ぶ場であったが、二代秀忠が表、中奥、大奥と明確に分け、三代家光の乳母、春日の局によって整備が整えられ、将軍が中奥から大奥に行く際には、御鈴廊下で合図を送り開錠させ、初めて入れるようににした。大奥は二の丸、西の丸にもある。江戸末期の地図では、本丸の大奥は南北に伸び、連なる建物になっている。この大奥の北端の左に天守閣がある。この本丸だけで約一万千四百坪。この広い空間の全てと言って良いほど、建造物で埋め尽くされている。

## 江戸城天守閣

最初の天守台は一六〇六年（慶長十一年）に構築され、翌一六〇七年天守を竣工。五重、五階。天守台を含めると高さ六五・四五メートル

トル（国会議事堂並）。比類無き、豪壮優美な外観。次が一六二二年（元和八年）。そして最後の天守閣が一六三六年（寛永十三年）に完成した。つまり天守閣は三度、構築されている。構造は五重、五階（地階を含めると六階）。壁面黒色塗装、銅板張り。屋根は銅瓦。派手な外観。高さ三十間、下総からも眺望できた。三代将軍家光の時に完成。江戸中から見渡せ、その偉容は江戸っ子の誇りであった。しかし、これも一六五七年（明暦三年）のいわゆる明暦の大火で焼失。以来天守台を残すのみで現在に至っている。

本丸、二の丸の、堀沿いの周囲は高い塀に仕切られ、内々堀の城壁の上をぐるりと囲むように立っていたので、その姿は城の全体像を映し出すように思えたであろう。加えて隅々に豪壮な隅櫓が建っている。最南の富士見櫓（三層）から北に行くと乾櫓、北をぐるりと回って北櫓、東櫓、翼奥櫓、さらに西丸御殿に行く蓮池翼櫓などである。これらは二

重三重構造で天守閣のような姿をしており、その特徴はそれぞれどこから見ても美しい偉容と、美観を示していた。隅櫓は戦国時代にあつては、防禦に重要な見張りであり、応戦の砦であつたが、江戸時代では、それ自体が城のシンボルとなつたのである。

家康は一六一六年（元和二年）駿府城で亡くなり、遺言によつて久能山東照宮に葬られ、一年後、日光東照宮に移葬される。遺骸は久能山に、葬儀は芝増上寺でというのが彼の遺言。東照宮とは彼の戒名東照大権現に因む。久能山は駿河湾沿いに横たわつており、地獄谷を経て日本平という絶景の山に囲まれていゝる。古くから宗教の聖地で推古天皇の六〇〇年、久能忠仁が山を開き、観音菩薩を安置。以来行基を初め高僧が住まい修行。ところが武田信玄がこの地形が西への橋頭堡として最適と久能城を建てる。家康も西の砦として重視、すぐ近くの駿府城で晩年采配をふるい、ここを要害の地とした。家康の遺骸は岡崎城



に向かつて埋葬される。二代秀忠、三代家光がここを再び東照宮として豪華絢爛たる社に（国宝）。そして日光東照宮を北の砦として造営する。ここにおいて家康は江戸を守る大地形をその死後も堅持せんとしたのである。久能山に行くとむしろ素にして堅固な平和を創造せんとする彼の意思を伺い知ることになる。

■ 図番3 江戸城中枢部

【参考文献】

「東京の地理が分かる辞典」 日本実業出版社 鈴木理生 著

「江戸城」 本丸御殿と幕府政治 中公新書 深井雅海 著